企業警備保障㈱　社長
（松江市大庭町）

後長　佑氏

人とIT技術の新しい警備 島根から全国へ発信したい

中国5県に拠点を構え、警備業地場大手の企業警備保障㈱（松江市大庭町）で、2020年12月に新社長に就任した。人とIT技術を掛け合わせた新しい警備の形を探り、島根から全国へ発信していきたいと将来像を描く。

人手不足に悩む中、新たな態勢強化に取り組む。20年7月に人工知能（AI）による交通誘導システム「KB－eye」の開発企業のパートナー企業になった。

「人手不足を感じるのは、働き方改革により、一人当たりの労働時間が減ってきたことが要因の一つ。求人を続けて人員を確保することはもちろんだが、さらに機械化によって補うことが必要だと考えている。『KB－eye』を今年からさまざまな建設現場で活用し、定着を図りたいと考えている。余裕のある休憩や業務の効率化が期待され、過酷な環境を改善することで新たな人材が入るかもしれない。交通誘導員から交通監視員へイメージアップしていきたい」

近年は警備業の転換期だと捉えている。

「『KB－eye』同様、AIによる配置システムやタブレット端末を取り入れており、デジタルによる効率化を進めている。まだまだアナログな部分が多い業界だが、デジタルを織り交ぜていき、新時代をつくりたい。人と機械、どちらかに偏るのではなく、第三の分野として確立し、島根から世界へ発信する」

今年中に松江支社を移転し、独自の研修施設「KKHアカデミー」を併設する予定だ。

「『KKHアカデミー』では管理職の育成や警備員の教育に取り組む。仮想現実（VR）を活用したトレーニングを考えており、現場に配置される前によりリアルな体験をして臨んでもらえる。他社と情報共有もして業界の盛り上げにつなげたい」

長く業界に携わっているからこそ、新社長として改革に取り組んでいく。

「『若いのになんで警備員をしているの』と現場で何度か言われたことが原点。こうした見方を変えていく責任があると思っている。若くても入りやすいよう、先陣を切ってイメージを変えたい」

（聞き手は藤本ちあき）

ごちょう・たすく
出雲市出身。出雲西高卒。2005年から大手警備会社で主に施設警備に従事し、隊長職を経験。08年に企業警備保障に入社し、16年から代表取締役副社長として会社経営に携わり、20年12月22日付で代表取締役社長に就任した。趣味はボクシングで、13年前に健康維持のために始めた。観戦も好き。出雲市高岡町。34歳。

編集室から

国内で新型コロナウイルスの感染者が初めて確認されてから既に1年が過ぎた。この間、さまざまな対策が講じられたが、厳しい状況は相変わらずだ。累計の感染者数は40万人に迫ろうとしており、死者数は5千人を優に超えた（1月28日現在）。再発令された緊急事態宣言は、2月7日の期限後も延長される見方が強まっている。

振り返るとこの1年、山陰両県でも多くの企業で経済活動が大きく制約され、業績悪化を余儀なくされた。倒産に追い込まれたところもある。働き方や暮らしぶりも変わり、コロナ以前の状況になかなか戻れそうにない中、我慢の日々が続く。

東京五輪・パラリンピックを目前に控え、経済界にも高揚感があった1年前とは打って変わって、閉塞（へいそく）感と危機感にあふれている今。コロナ禍に的確に対応し、業績を上げている企業もあり、過度に悲観したくないが、全体としては厳しいと言わざるを得ず、苦境の長さを実感する。　（吉川健治）